

「生成発展」について

松下理念研究部長 佐藤 悌二郎

生成発展は自然の理法

「新しい人間観の提唱文」の冒頭は、「宇宙に存在するすべてのものは、つねに生成し、たえず発展する。万物は日に新たであり、生成発展は自然の理法である」という書き出しで始まっています。「ここから分かるように、『生成発展』という言葉は、PHP理念の中で、もっとも重要な意味をもつ言葉の一つといつてよいでしょう。PHPのことはその「繁栄の基」の「かぎりない繁栄と平和と幸福とを、真理は、われわれ人間に与えています」といつ考え方も、この『すべてのものは生成発展する』という考えがあつてこそ、さういえるわけです。これがなければ、PHP理念は崩れてしまつといえるでしょう。

では、松下幸之助は、いつからこの『生成発展』という言葉を使うようになったのでしょうか。いま見ましたように、『生成発展』という言葉はのちにPHP理念においてきわめて重要な意味をもつことになるわけですが、残された資料をみますと、戦前にはこの言葉は確認できません。発展だけあるいはそれに近い「進歩」「発達」「繁栄」と言つた言葉は出てきますが、「生成」という言葉、また「生成発展」といつた形ではまったく出てきません。そしてそれは、戦後、PHP活動が開始された当初においても同様です。

この言葉が初めて資料に現れるのは、PHP研究所が創設されて四カ月ほど経つた昭和二十二年三月二日のことです。小堀保三郎氏邸で行なわれた「PHP講演懇談会」での質疑応答の中で、「このPHPの仕組みが完成すればとなたが総理大臣になられても生成発展していく」といつことが建前でありあなたも総理大臣になられても、「この政策を用いてくださればいい」とあります。

ところが、つぎにその言葉が認められるのは、それからさらに十一月後の昭和二十三年二月一日、大阪市立愛珠幼稚園でのPHP講演懇談会においてです。

この愛珠幼稚園での講演懇談会にはじめて「素直な心」といつ言葉が語られ、『PHPは素直な心になる運動だ』といつ考えが表明されたときでもあるわけですが、このときの講演で、松下は、「要するに百パーセントの自由があり、百パーセントの秩序がある、百パーセントの生成発展がある」といつことをもつて文化国家といつことなんですよ」と述べています。

その後、同月二十三日から毎月一回行なわれるようになった「PHP定例研究講座」で「PHPのことは」が順次つくられるようになります。自由をひろげ、秩序を高め、社会の生成発展をもたらすところに、一切の学問の意義があります。PHPのことは、その三「学問の使命」二十三年四月発表」といつ文言を皮切りに、次第に登場頻度が増えてき、昭和二十四年九月にはついに、「生成発展」といつ「PHPのことは」が、その二〇として発表されることになったのです。

当を得ればうまくいく

松下は、いつ頃から、こいつた『生成発展は自然の理法である』といつ考えをもつようになったのでしょうか。これについてはよく分かりませんが、そのヒントになると思われるのは、大正十四年頃に、ある知人から成功の秘訣を尋ねられたときの答えです。そのとき松下は、「商売は必ず成功するものだ」といつ、つぎのように答えています。

「僕は事業といつものは、大小の差があつても、やつただけは成功するものだ」と根本に考えている。……商売も活動するだけそれだけの成功は得られなくてはならない。もしそつでなかつたならば、それは環境でも、時節でも、運でも、なんでもない。その経営の進め方に当を得ないところがあるからだ」と断じなくてはならぬ。それを商売は時世時節で、損もあれば得もあると考えるところに根本の間違いがある。……」

（『私の行き方 考え方』）

やり方さえ当を得れば成功するよつになっている、うまくいくよつになっているといつわけですが、ここには『生成発展は自然の理法』といつた表現は出てきませんが、考え方としては、それに近いものがあるのではないかと思ひます。生成発展するものが自然の理法だから、自然の理法に従えば、つまりやり方さえ当を得れば生成発展する、成功する、うまくいくといつわけです。

それがもう少しはっきりした形で現れたのが、「松下電器の遵奉すべき精神」にある「順応同化の精神」でしょう。昭和十二年八月十日に『遵奉すべき五精神』（昭和八年制定）に追加された「順応同化の精神」の付随文に、「進歩発展は自然の摂理に順応同化するにあらざれば得難し」とあります。

希望の哲学

では、なぜ『生成発展』といつ考え方が生まれたのでしょうか。それは、「PHPのことは」その二〇「生成発展」の中で『もし毎日毎日が単なる繰り返しの連続にすぎないものとしますと、私たちの人生には何の希望もなく、全く意味のないものになってしまつてあります』とあることから推察できますよつに、結局、どつちの見方が、お互いによつて希望や意味を見出すことができるか、といつことに行き着くといえましよう。PHPを達成するには、衰退、消滅ではだめで、生成発展していくからこそPHP実現の希望がもてるわけです。

『実践経営哲学』の中に、「こつこつと生成発展と考えること」といつ章がありますが、経営者松下幸之助としては、まさにこつこつとした考え方に立たなければ、みずからの行なつてい事業経営に、意味と希望がもてなかつたのでないか、そんなことも感じられます。

この「こつこつと生成発展する」といつ考えは、松下にとつて、最初は『あるべき姿』あつて欲しい姿』であつたと思ひますが、それはしだいに『信念』となり、さらに『真理』となつていったのではないのでしょうか。

いずれにしても、PHPの考え方（それはイノール松下の考え方になるわけですが）の特徴は、何事もプラスにものを考える、いわば『希望の哲学』であり、そしてその基をなすのが、この「生成発展」といつ考え方だといえましよう。